

元 会 長
名誉会員

藤井松太郎氏のご逝去をいたむ

去る2月14日、元国鉄総裁藤井松太郎氏はJR東日本中央鉄道病院で心不全のため逝去されました。84歳の高齢とは言え、国鉄の民営分割という大変革が行われてまだ1年にもならず、なお今後も我が国の鉄道運営上いろいろの面においてご指導を迎うべきとき、他界されたとは誠に痛恨の極みであります。

藤井さんのご経歴については今さら多言を要しないと思いますが、一応その跡をたどってみると、昭和4年3月東京帝国大学工学部土木工学科を卒業されると鉄道省に入られ、建設現場や本省に勤務された後昭和24年には信濃川工事事務所長、ついで27年には日本国有鉄道の技師長になられました。そして33年に一度国鉄を退職されると、当時の東海道新幹線建設工事に伴って激増した設計業務を国鉄外部から支援するため日本交通技術株式会社が設立されたのですが、その社長として会社の経営と後輩の指導にあたられました。そして昭和38年5月当時の国鉄総裁石田礼助氏のたつての依頼により国鉄の技術長に再任されました。その間昭和37年には(社)土木学会の会長を、また38年には(社)土質工学会の会長を勤めておられます。また昭和31年には東京大学より工学博士の学位を受けられましたが、その論文は大阪駅の沈下対策に関するもので、いま拝読してもその研究は非常に周到な調査と深い洞察力による対策の立案であって、特に設計や施工の複雑に入りくんだ問題に対し常に大局的観点から精確な対策を引き出しておられることは、敬服のほかはありません。この論文の奥には藤井さんの真の姿が潜んでいるように思われます。

昭和48年には第7代国鉄総裁に就任され、労働問題や経済問題でますます困難の度を強めつつあった国鉄の再建のため奮闘されたことはまだ記憶に新しいところです。その結果、昭和49年11月には勲一等瑞宝章を受けておられます。また52年には(社)日本鉄道施設協会会長、(社)海外鉄道技術協力協会理事を、56年から62年までは(社)日本交通協会会長として斯界のために尽されています。

多くの人は藤井さんのことを豪放磊落の人だったと言われます。まさにその通りですが、その裏には実に細心な心くばりがありました。植物の名称に詳しかった話もあるし、読了された内外のどの文献にも重要なところに赤いアンダーラインが引いてあったことは有名な話ですが、仏像を愛し仏教に造詣が深かったことが総ての考え方の基本であったのではないかと私は思っています。私事にわたって恐縮ですが、思い出の一端を述べさせてもらいますと、藤井さんが二度目の技師長の頃、私の鉄道に関する書物の上梓にあたって序文を書いてもらったことがあります。このようなとき多くの人は序文の案を作って伺い、手を入れてもらうことが多いのですが、私は藤井さんならむしろそうしないほうが良いと考え、自序と目次のみを持参してお願いしたところ、快く引き受けてもらい、数日後に立派な序文をいただいて、大変有り難く思ったことがあります。しかし驚いたのはそのことだけではなく、それから10年以上たって、内容も全面的に改訂し書名も変更して再び上梓したとき、前触れもなく藤井さんを八重洲の施設協会会長室に訪れて新版を献呈したところ、藤井さんは新版の目次を見ながら、「前の本とはこことこことが改訂されている」と実に正確に指摘されました。目前の現象はできるだけ詳しく把握するが、それに捉われないで常に大局的見地からその奥にひそむ本質を見抜くという態度の現れであると私は感じ、頭が下る思いがしたものです。

藤井さんが我が国の鉄道界に残された業績は実に多く、筆舌に尽し難いところであります。ご遺徳を偲び謹んでご冥福をお祈りいたします。



(不動建設(株)顧問 西亀達夫)

社団法人 土質工学会